

ば く り ゆ う  
麥 粒

2010. Spring

麦粒 / NO. 115

発行・キリスト教センター

目 次

笑いが起こるには? .....	吉澤 永 ( 2 )
クリスマスは誰のため? .....	野村 潔 ( 5 )
信仰の旅路 .....	葛井 義憲 ( 9 )
新入生のみなさんへ .....	( 14 )



Culture & Human Resources  
NAGOYA GAKUIN UNIVERSITY

# 笑いが起こるには？

吉澤 永

死者の復活ということを聞くと、ある者はあざ笑い、ある者は、「それについては、いずれまた聞かせてもらうことにしよう」と言った。それで、パウロはその場を立ち去った。しかし、彼について行った信仰に入った者も、何人かいた。その中にはアレオパゴスの議員ディオニシオ、またダマリスという婦人やその他の人々もいた。

(新約聖書 使徒言行録17章32～34節)

皆さんは「お笑い」は好きですか？ 私は大好きです。テレビでお笑い番組を見ることはもちろん、大阪なんばグランド花月の吉本新喜劇に今まで3回も行きました。吉本新喜劇はテレビでも放映されていますから、劇場で「以前にテレビで見たことあるな」というものもあったのですが、やはり「生」ならでは！ の臨場感があって、爆笑、爆笑の連続でした。誰がボケて、それから誰が突っ込んでこうなると、先が分かっているのにもかかわらず、笑わせてくれるのです。やはり吉本新喜劇はすごいなと思います。

また私は6月に東京新宿の「ルミネtheよしもと」にも行ってきました。私は牧師ですから、月曜日が休日ということになっていますので、平日である月曜に行ったのですが、平日にもかかわらず立見席しかなく、二時間半、立ちっぱなしでした。土曜、日曜は有名な人が出るけれど、月曜じゃ・・・と思っていましたが、その思いは良いほうにはずれて

“大当たり！”で、売れている人たちが多く出演していました。二時間半もう笑えばなしで、大満足の休日を過ごすことができました。

先日、大須の商店街で面白いものを買いました。ここに持ってきましたが「オモシロクナル」と「ヨクスパール」というふたつのお菓子です。中味はただのラムネ菓子なのですが、このピンや箱に書いてあることが面白いのです。成分表を読みますと「ウケテショウガラフェン」とか「ワライトマラフェン」配合と書いてあります。ほかに「ミンナエガオニナル」「スベリシラズン酸」「ドカントウケルン酸」なども書いてあります。このふたつのお菓子はセットになっていたのですが、なぜか「ヨクスパール」は食べる気がしません。私は今日はみなさんに「笑い」について考えてもらおうと思って話をしにきたのですから「オモシロクナル」を食べて、「ヨクスパール」のほうは食べないできました。だから今、私

の話はすべていいじゃないでしょうか？

「笑い」は人の心を明るくし、いやなことを忘れさせ、そして生きる力を与えてくれるものです。でもこのように笑わせてもらう側は良いことばかりなのですが、笑わせる側はそう簡単ではなく、大変プレッシャーがかかるのです。いっしょうけんめい演じて誰も笑ってくれない、いわゆる「すべる」、つまりシーンとしてしまうとそれは芸人にとってほんとうに怖いことです。

ですから私はお笑い芸人たちを尊敬しています。それはたゆまぬ努力と強い心を持っていなければ決してできない仕事をしているからです。

ルミネtheよしもとにいて感じたことですが、あの舞台に立っている芸人たちは自分たちの芸を磨くために、ほんとうに真剣に舞台に立っているということです。ルミネに出演している芸人たちの出演料は、安い人だと500円、ベテラン級の人でも数千円だそうです。それなのにみんなあの舞台に立ちたがるのです。理由は自分の芸を磨くために、生ライブで芸を披露することによって、芸人としてのレベルを上げる、芸を磨くことができるからです。

お笑い芸人の人気は賞味期限が短いので人気はパッとでても、ほとんどの人が「一発屋」で終わります。すると収入がなくなります。お笑い芸人は自分の笑いが世間に受け入れられなければ、すぐに自分の生活が成り立たなくなるのです。どんな実力のある芸人でも、そんな危険と隣り合わせで自分の芸を磨いているのです。いろいろな意味で

強い心を持っていなければ、続けていくことはできない仕事だとつくづく思うのです。

このあたりで聖書の話にしましょう。そうでないただのお笑い好きのおっちゃんのおしゃべりと思われまからぬ。

先ほど読んでいただきました聖書に、パウロというイエス・キリストの福音を宣べ伝えた人が、ギリシャのアテネで伝道したという話が書かれていました。当時のアテネにはローマ帝国中から、あるいはイメージとしてはヨーロッパ中から偉い学者が集まっていて、学問の都市として栄えていました。アテネの人々は知的好奇心旺盛で、新しい学説や教えを好んで受け入れる傾向がありました。ですからパウロの話しにも、大勢の人が興味を持って集まってきました。最初は熱心に聴いていたのですが、パウロが「死者の復活」ということを話し出すとアテネの人々は彼をあざ笑いました。「まあ、それはまたいつか聞かせてもらおうよ」と。「ばかばかしい」と相手にされなかったのです。

パウロはキリスト教の創成期に非常に大きな働きをした人です。この名前は英語ではポールですね。ピートルズのポール・マッカトニーをはじめポールという名前の人は多いですが、これは聖書のパウロから取られた名前です。パウロようになってほしいという親の願いでしょうか。

しかしパウロはどこでも受け入れられたわけではなく、アテネの偉い学者たちからバカにされるのは序の口で、迫

害され、牢獄に入れられたりします。それはすべてイエス・キリストの福音を宣べ伝えたからです。そのために幾度となく命の危険にさえさらされました。パウロはイエス・キリストの福音伝道者になる前は、ユダヤ人としてエリート中のエリートでした。イエス・キリストの福音を宣べ伝えたりしなければ、今日的な言葉で言えば、あまり好きな言葉ではありませんが「勝ち組」でした。勝ち組のトップとして出世街道をばく進する人でした。しかしパウロはキリストの伝道者になったがために、この世的な名誉をすべて失うことになったのです。でも彼は全く後悔していません。

聖書のフィリピの信徒への手紙3章7節でパウロは「しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくたと見なしています。キリストを得、キリストの内にいるものと認められるためです。・・・」と語っています。ここでパウロはキリストを知ることの素晴らしさに比べ、この世での名誉、高い立場を「塵、あくた」と語っています。他の聖書では「糞土(ふんど)」と訳しています。

この変化は、パウロがキリストの福音に出会ったことによって、何にも代えられない大きな喜びが与えられたことによって起こりました。だからパウロはどんな苦しい目にあっても、死ぬほどのひどい目にあっても、喜びをもって前進することができたのです。

みなさんもこの難しい時代を生き抜くためには、強い心をもっていなればなりません。お笑い芸人と福音伝道者、まったく関係ないと思われるこの両者には共通点があります。それは勇氣と誇りをもたなければ、この仕事を続けることができないということです。

お笑い芸人たちは先輩芸人たちからその芸と心意気を学び、私も含めて福音伝道者は聖書に記されている言葉から、また先輩伝道者からそのスピリットを学びます。

名古屋学院大学に学ばれるみなさんは勉学とともに、ここでキリスト教主義大学ならではの、生きるためのスピリットをも学んでください。この大学には強い信仰をもった先生方がおられます。その先生方からも多くのものを学び、勇氣と誇りをもって、日本の社会に貢献できる人物になることを目指して学びを続けていってください。神様が皆さんの道を導かれますように、お祈り致します。

(よしざわひさし 愛知教会牧師 2009.11.27 チャペルアワー奨励)

# クリスマスは誰のため？

野村 潔

そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行なわれた最初の住民登録である。人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。身ごもっていた、いいなずけの MARIA と一緒に登録するためである。ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、MARIA は月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋に彼らの泊まる場所がなかったからである。

その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」

(新約聖書 ルカによる福音書 2章1～12節)

私は、皆さんが生まれる前の1980年に東京の牧師を養成する神学校を卒業し、名古屋に参りました。私が名古屋に赴任した当時、その教会のメンバーが野宿生活者の支援活動をしておりました。その頃は、日雇労働者と呼んでいましたが、現在はホームレスと言えば皆さんには伝わりやすいでしょうか。

この活動が始まったのは、私が名古屋へ来るより、更に5年ほどさかのぼるのですが、1975年の冬のある日の新聞

に、名古屋で11名の凍死・餓死者が出たという記事が掲載されました。11名もの人々がなぜ凍死したのかといえますと、野宿をしていて、冬の寒さの中で食糧もなく遂には力尽きて死に至ったということでした。この話はどこかの雪山でもなければ、あるいはアフリカの貧しい国で起こったことでもなく、この豊かな日本のど真ん中の都市、名古屋で起こった出来事でありました。

この報道に多くの人々がショックを受け、なんとかしなければと調べはじ

めたら、その頃は、名古屋駅やその周辺で、野宿をしている人々がたくさんいることに気がつきました。その後、何人かの人々がボランティアでおにぎりと味噌汁をつくって配ったそうです。ところが、配り方が悪かったのだと思いますが、中には、「俺たちは乞食じゃないんだぞ！」と怒って味噌汁の入った器をひっくり返されたこともあったそうです。

しかし、やがてそういった人々の意見にも耳を傾けながら、名古屋駅の構内で週2回、おじやを配り始めました。それが今から35年ぐらい前の話です。しかし、その後、名古屋駅での活動が規制されたので、栄のもちの木広場に移動しましたが、そこでも不都合があり、現在は丸田町のゲートボール場で行なっております。

日雇労働者と呼ばれる多くの人々は、もともとは北海道や九州など炭鉱の町や農村地帯の出身者が、出稼ぎで来ているケースがほとんどでした。かつて、石炭は日本の主要エネルギーでした。それが1950年代から石油が主要エネルギーとなってからは、必然的に石炭の需要が減り、多くの炭鉱労働者が職を失う結果となりました。そういった失業者たちは、東京や大阪などの都心へと出向き、肉体労働の仕事に従事することになりました。

また、戦後の日本は工業化をどんどん推し進めていきましたので、そのしわ寄せが農業に向かいます。工業製品を海外に売る代わりに、農作物を輸入しなければならず、政府は農作物、こ

とに米を自由に作らないような農業政策を実施します。その結果、農業従事者の生活が貧しくなり、ことに専業農家が多かった東北地方の人々は現金収入を得るために、稲刈りが終わった後、大都市へと出稼ぎに出るという構造になってしまいました。

出稼ぎの人々の中でも、比較的体力のある若者は、長期間の雇用契約を得ることが出来ました。しかし、年齢の高い人や身体があまり丈夫でない人は、日雇いというかたちで、その日暮らしを強いられることになりました。景気が良いときはいいのですが、景気が傾くと真っ先に切られるのは日雇い労働者たちでした。現在は、派遣社員の人々がそういった役割を背負われています。

大都市には「寄せ場」と呼ばれる、こうした労働者たちが集まる場所があります。名古屋では笹島という所にあります。その寄せ場に路上求人といひまして、違法ではありますが、労働者を雇う人達が集まってきます。見た目が若くて体力のありそうな人が選ばれ雇われます。年配の人たちはどうしても採用から漏れてしまい、その日の収入を得ることが出来なくなります。こうした日が何日も続くと、ドヤという安い宿にも泊まれず、路上での生活をしなければならなくなります。

しかし、彼らは、毎日、その路上求人期待して、毎朝3時、4時には寄せ場に集まります。路上求人は、毎朝、5時、6時から始まり、予定の人数を確保したら、建設現場に向って行ってしま

います。

結果的に残された人たちは、またもとの公園とかビルや高架の下とか、駅の中などに戻って寝たりすることになるのです。我々が目にする光景というのは、そのような状況の人々なのです。

ですから、彼らの多くは、実は働く意欲のある労働者なのです。そのことを知らずに、わたしたちが単純に「かわいそう」と思っておにぎりを渡そうとしたのですから、怒るのも当然だったと思います。

野宿をしながら一生懸命に仕事を得ようとする人たちを、何とか応援しようということで、教会を中心に支援活動が始まりました。30年前に私が名古屋に来た時がちょうどその時期でした。しかし、この30年間で時代が随分変化してきて、日雇労働者の数は徐々に減少していきました。最近の野宿生活者の傾向として、社員であれ、あるいは派遣社員でも、会社の人員削減によって仕事を失ったサラリーマンなどが多くなりました。もちろん、メンタルな病を患う人、外国人、あるいは、かつてほとんど見かけることがなかった女性たちや若者も、増加の一途をたどっております。

このような状況を知らない人々は、彼らを見て「なまけもの」と思うかも知れませんが、経済不況により労働市場からはじき出された、働く意欲があっても条件的に不利な立場にあって働けない人たちが、仕方なく路上や公園で野宿をしているといった現状なのです。

今から20年前、私はニューヨークや

カナダのトロントで野宿生活者の支援活動を見学してきました。当時のニューヨークは10万人のホームレスがいると言われていました。ニューヨークの冬は零下になり、あっという間に凍死をする人が続出します。その頃のニューヨークは、グランドセントラルという中央駅や地下鉄の構内をホームレスの人たちに開放していました。また、トロントでは、行政が倒産したホテルを買い取って、NGOに貸し出し、それを宿舎として提供したりしていました。

海外では、このような支援を行政の協力を得てしていましたが、その頃の日本には、まったくそのような働きをする行政機関はありませんでした。名古屋駅などは最終列車が出た後、それまで駅構内で寝ていた人は皆追い出され、全ての入り口を閉鎖してしまいました。

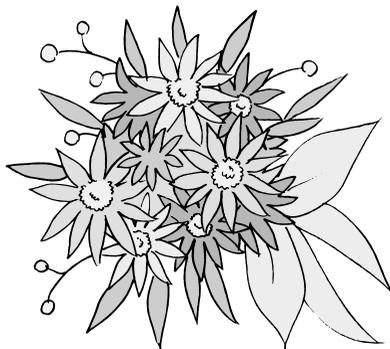
そこで、私たちは炊き出しをしたり、生活保護の申請の手助けをしたり、あるいは病院や施設の入所の手配などの活動をしてきました。特に年末年始は、公園にテントを張って毎日炊き出しをしたりしており、それを「越冬活動」と呼んでいます。今年で35年目を迎えました。私たちは10年ほど前に「ささしま共生会」というNPOを設立して、野宿者の自立に向けての支援活動を続けております。

先ほど読んで頂いた聖書箇所ですが、イエス・キリストの誕生のクリスマスの場面が描かれております。イエス・キリストは、マリアとヨセフが旅をし

ている途中に産まれます。宿屋は満員で、彼らは泊まる宿もなく、野宿者として家畜小屋を借り、そこで幼子イエスの誕生を迎えます。その主イエスの誕生は、貧しくて家もない人々に知らされました。しかも、救いの喜びとして告げ知らされたのです。キリストの誕生であるクリスマスのメッセージは、そういった貧しい人々への福音、救済という形で世界中に広がっていきました。

冬もだんだん厳しくなり、名古屋も結構な寒さです。寒さの中、現在も野宿を強いられている人々が世界中にたくさんいることに、皆さんも思いを巡らしてください。どうかこれ以上、野宿生活者が増えないよう、そして一人として犠牲になることなく、クリスマスや新年を迎えることができますよう、是非皆さんのご協力とお祈りをお願いしたいと思います。

(のむらきよし 日本聖公会司祭 2009.12.15 チャペルアワー奨励)



# 信仰の旅路

葛井 義 憲

主はアブラムに言われた。「あなたは生まれ故郷父の家を離れてわたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にしあなたを祝福し、あなたの名を高める。祝福の源となるように。あなたを祝福する人をわたしは祝福しあなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る。」

アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。

(旧約聖書 創世記12章1～4節)

また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください。』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄使いしてしまった。何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起って、彼は食べるにも困り始めた。それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。ここをたち、父のところに行つて言おう。』「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。』そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。息子は言った。『お父さん、私は天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き

返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

(新約聖書 ルカによる福音書 15章11～24節)

人類の命の歴史から見ますと、本学の前身である名古屋英和学校が創立されてから今日までの122年という年月は、ほんの一瞬でしかありません。しかし、たとえ122年が長い歴史のほんの1コマであったとしても、そこには学校に関わった人々の喜びや涙がいくつもありました。

この122年の信仰と教育の旅は、アブラハムの旅と連動しております。アブラハムは聖書によると、交易都市ハランを旅立ったとあります。世界中からたくさんの品物が集められ、商売の盛んな賑わいをみせるハランを彼は立ち去り、旅立ったのです。それは、神様の意向に応える行ないでありました。創世記12章の4節はこう語ります。「アブラハムは主の言葉に従って旅立った。」この聖句を反復してじっくり咀嚼してみると、おやっ？ と何かを感じるかと思えます。自立したいとか、主体的に自由に生きたい、また自分を中心にして希望を持って生きたいなどと、我欲が先行しやすい現代の私たちにとって、アブラハムが決断してとった行動は、理解に苦しむ行ないです。

アブラハムは、自分の生きる中心に命をお造りになった神様を置いたわけです。それはすべてを神様にゆだね、神様の導きのもとにこの世で生き、旅をするということへの決意であります。アブラハムはひたすら神を仰ぎ、その中でこの世の自分の道しるべは、ただ

神のみと確信を得たのです。

しかし、神を中心に据えた旅は、決して平穏なものではありませんでした。聖書を読んでみますと、その旅路は壮絶であったことがわかります。ぬかるみやいばらの道を歩み、迫害や差別を受ける受難の旅でありました。その旅路において人の気高さと共に、人間の醜悪さをもアブラハムは見せ付けられます。社会の温かさと共に、残虐さを垣間見ることになります。人々の優しさと共に、悪意や憎しみを味わわれることになります。神様がお造りになられた可憐な野の花の傍を、アブラハムは、あざけりやまた黒声さえ浴びながら歩いていたのでした。

と同時に、アブラハムはそれ以上の深い慈愛を神様から受けたことも事実です。信仰の旅は、アブラハムが神様の呼びかけに応じて、自分が歩み出した旅でありました。その旅の中で、苦難を与えられましたが、また喜びもたくさん受けたのです。

キリストに連なる旅も同じことが言えます。「神われらと共にある、インマヌエル」という言葉が新約聖書にありますが、正にそれはアブラハムのように旅を続けていく中で、神が共におられることを信じる旅です。私たちが神に促されて歩むというのは不思議な旅路であります。そこには明瞭な理由付けや、皆を満足させるような明確な説明はありません。ただ、神様の呼びか

けに応え、神様と共に歩む旅としか表現できないのです。現代人の視点で考えると、どうしてそのようにリスクを犯して生きるのか？ なぜ不安定な生き方を選択するのか？ などたいてい疑問に思えることでしょう。

キリスト教の信仰においては辛いことも多く、神の意思に従って献身的に正しく生きていても、何かと不条理な出来事が身に降りかかることもあります。しかし、その辛い旅の道のりの中で、少しずつ光が辛い心へと射し込み、全身の痛みが徐々に消えていくような瞬間、喜びを体験するのです。

私たちは誰でも神に祈ることができません。それは喜びです。イエス・キリストの御言葉に触れることができます。静かに黙祷を捧げたときに、聖霊の働きに気付かされ、聖霊の愛の風が、私たちの内を吹き抜けてゆくような感覚を味わうでしょう。神様はいつも一緒にいてくださり、共に歩み、時に導いてくださるのです。アブラハムの信仰の旅に連なった者たちは、このような実感を抱いておりました。その実感は信仰の財産となりました。多くの信仰の旅人は、信仰を素直に証しし、信仰に基づく思索をし、信仰に基づく豊かな愛の働きを行なってまいりました。そして人々に力と勇気と希望を与えてまいりました。

我々も、この信仰の財産を受け継いで、尚一層、喜びに溢れて信仰の旅を続けていこうではありませんか。倒れても起き上がり、キリストの愛の業を証ししていくのです。そして、この長

く尽きることない、連綿と連なる神を信頼する信仰は、これからもどれほど多くの人々に勇気を与えていくのでしょうか。神の大きな愛、神の広い赦しの心は、聖書全体に流れているものであります。

ルカによる福音書の中にも、その神の赦しについて書かれていました。ここは放蕩息子の物語と昔から言われている箇所です。この息子は、ある日から財産を貰い、町へと出かけて行きました。しかし、この甘ちゃんの息子はその町で誘惑に遭い、財産を全て使い果たします。彼は帰ることも出来ず、豚が食べるエサさえも食べることが出来なかったのです。放蕩息子はどん底の中で、故郷の父を思い出します。優しさも厳しさも含んだ、父親の存在の大きさを懐かしく振り返ります。

この息子は早く父のもとを出たいと町に来たものの、どん底の生活に陥り、苦勞を体験することで、改めて父のありがたさを思い知ったのです。彼は父のもとへ、恥ずかしさや見栄を捨て、素直に帰ることにしました。ここでの父と息子の姿は、正に私たちと愛の神様と触れ合う姿であり、赦しと信頼が満ち溢れた光景を描写しております。ルカによる福音書15章20節を見てみますと、「彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は彼の姿を見つけて、憐れに思い、走りよって首を抱き、接吻した。」とあります。神様が私たちに向けてくださる大きな愛が、この箇所に記されています。見捨てることなく、

神は忍耐して私たちを見守られています。私たちは窮地に陥った時にこそ、神の深い愛を深く感じ取ることができるのです。

三谷隆正という人物がおります。1889年に誕生し、1944年に召されました。彼は女子学院2代目院長三谷民子、あるいは大衆文学を質的に向上させたとされており「まぶたの母」や「一本刀土俵入り」の作者である長谷川伸の弟です。新渡戸稲造、内村鑑三の弟子でもありました。旧制第六高等学校、第一高等学校の教授で法哲学者でした。彼はまた、大変熱心な信仰者であり、非常に温かい人格者でした。しかし、この彼もまた、徹底的な辛酸を舐める経験をします。しかし、それらの出来事が彼を更に高め、向上させることとなります。この事実に触れますと、なんと信仰とは厳しく凄いものであるかを思い知らされます。三谷は、岡山の第六高等学校時代に結婚をいたしました。若い時分に結核を患っていたために、結婚は諦めていたようですが、1923年の34歳の時に、児玉菊代さんという方が彼の伴侶として嫁いでまいりました。共に祈り、学び、喜ぶ大変幸せな生活を送っておりました。翌年1924年には長女、晴子さんが誕生しました。しかし生まれて3週間後、彼女は天へと召されていきました。またその4ヶ月後、妻菊代さんも天へと召されていきました。三谷のその悲しみは、想像を超えるものであったでしょう。彼は妻の死後、いくつかの歌を詠みました。二つご紹介します。

いも逝きて十日を経なり朝まだき  
ふと 泪わきてとどめあへざり

君逝けど君のいましし室にいて も  
の言いかわすまねしてみたり

三谷の深い悲しみが伺えます。菊代さんが亡くなってから1年8ヶ月経った頃、彼は岩波書店から『信仰の論理』という書物を出します。その書物は、妻菊代さんに捧げるものでした。その中で、こう述べております。

「私、三谷の僅かばかりのこれまでの歩みを省みましたときに、そこに如実に他者の他力を体感します。これまでの人生を彩る大いなる転機は、私自身が練りに練って計画したとおりに訪れたものなどありません。私は、私の一生を導くものは、私自身の私意工夫ではなく、大いなる他者の力であることを実感します。私は、私の大いなる幸福と、人の思いを超えた満足とは、決して私の私意工夫によって訪れるものではなく、私の願わない苦痛と、思わない艱難を通して他者より与えられていると、感じられるようになりました。私はもはや、私の計画の成就されないことに失望はしません。私を導く力は、私自身よりはるかに大きくはるかに賢くあり、私が私自身を愛する以上に、強く且つ正しき愛によって包んでくださる。それは絶対的、徹底的な他者の力と知恵であることを信じて、安心して力いっぱい、人生という苦難な冒険を成したいと思います。」

三谷は悲しみと絶望のただ中で、神を見上げて、神に信頼して寄り添って生きると表明するのです。不確かな自己ではなく、具体的、絶对的に信頼できる、愛の神を崇めると決意します。彼は、正にそのように人生をまっとうしました。そして彼は、大正・昭和の時代の中で、最も優れた教育者として挙げられるようになったのです。また、彼は戦後の東京大学総長の南原 繁等の教育者から、舌を巻くほどの人格者であるとも評されました。

三谷はアブラハムたちと同じように、徹底的に神の業に励み、神から与えられた教育に生きようと思いました。私どもの122年、そして名古屋学院大学の45年の信仰と教育の歴史は、こうして同

じ信念に連なる人々が、祈りと、愛の業と、学生たちに仕える思いをもって、この歴史を刻んでまいりました。私たちの歴史は神によって祝され、これからも続いていきます。今まで私たちを支えてくれた多くの先輩たちに連なって、一人一人が大事にされ、そして一人一人の可能性が十分に引き出される教育の場を作り上げていくことが、ここに連なる私たちの役割です。そして、この旅路は、更に次の世代の人々に継承されていくものとなります。

これからも、キリストの愛の業を表わす神の僕として、また信仰の旅路の継承者として、更なる飛躍の旅を続けたいと願っております。

(ふじいよしのり 人間健康学部長・宗教部長 2009.10.15 大学創立記念日礼拝 説教)



## 新入生のみなさんへ

### 敬神愛人



「先生、法律の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」  
イエスは言われた。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを  
尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最  
も重要な第一の掟である。

第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分の  
ように愛しなさい。』 - 」

(新約聖書 マタイによる福音書22章36節～39節)

(F. C. クライン)

名古屋学院大学に入学された皆さん、ご入学おめでとうございます。  
皆さんは自分で選んだにせよ、大学に選ばれたにせよ、とにかくこの  
大学の学生となられたのです。皆さんはこれから勉強される大学につ  
いて、どのようなことをご存知でしょうか。これからいろいろな機会  
に聞かれたり、読まれたり、学んだりされると思いますが、ここでも  
少しお伝えしておきたいと思います。

私立の学校はそれぞれ独自の理念、「建学の精神」を持って建てら  
れ、またそれを継承して運営されています。わが名古屋学院大学の  
「建学の精神」は「敬神愛人」です。これは冒頭に書かれています新  
約聖書の、イエス様の言葉から来ています。

人間は神を愛し敬うこと、そして自分を愛するように隣人を愛する  
こと、この「敬神」と「愛人」を一番大切な掟として守らなければなら  
ないという、イエス・キリストの教えです。これは、ただ人と仲良く  
しなさいというヒューマニズムからだけでなく、神を敬うことによっ  
て成立する隣人愛です。これを教育の基本にしているのです。

1883年、アメリカからフレデリック・チャールズ・クライン (F.  
C. Klein) という宣教師がキリスト教の伝道と英語教育を目的として

来日しました。そして横浜に英語学校、教会を創るなどの成果をあげ、彼が次の着任地として夫人と名古屋に来たのは1887年でした。そして名古屋に着いたその日から英語の学校を開いたのです。「愛知英語学校」と名づけられた学校は「名古屋英和学校」と改称され、それがわが名古屋学院大学の基となりました。その時、クライン博士がその教育の基本理念として掲げたのが「敬神愛人」でした。

皆さんはこれから少なくとも四年間はこの大学の学生として勉強をしていきますが、人間としての自らを成長させることにも励んでください。

そして私たちは祈っています。「敬神愛人」が示すように、皆さんが自分を愛するように他人を愛することができますように、また、人間の力を過信することなく、それをはるかに超えた存在を認める、謙虚な人間へと成長を遂げることができますように。

## チャペルへの招き

チャペルではチャペルアワー、カレッジアワーと称してキリスト教の礼拝の時間を設けています。教職員や近隣教会の牧師の奨励を聴き、賛美歌を歌います。大学は決して、皆さんにキリスト教の信仰を持たせようと考えているわけではありませんが、世界の大きな文化の源流の一つともいえるキリスト教に少しでも触れて、何かを感じていただければと考えております。

<名古屋キャンパス> : チャペルアワー 火曜日12:40~13:10  
カレッジアワー 木曜日12:40~13:10

<瀬戸キャンパス> : チャペルアワー 金曜日13:00~13:30

その他チャペルでは、様々な活動を行っています。  
詳しくはチャペル前の掲示板をご覧ください。

その他チャペルでは音楽の集いや読書会など、様々な活動を行っています。またチャペルは原則としていつでも開いています。静かに落ち着きたいときはどうぞお気軽にご利用ください。祈りの場として皆様を招いています。

## チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」のお話をブックレットにまとめ、発行しています。無料でどなたにでも差し上げますので、ご希望の方は、キリスト教センターへどうぞ。チャペルにも置いてあります。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洸善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纒)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(柏木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？」  
- こどもの物語と聖書に見られる<しょうがい者>差別 -  
(荒井 英子)
- No.14. 「お父さん、僕はなに人? - 間(はざま)から読む聖書」  
(金 永秀)